［認知症対応型共同生活介護用］

1．　評 価 結 果 概 要 表

作成日　平成22年3月1日

【評価実施概要】

事業所番号	0173600495		
法人名	医療法人　社団　玄洋会		
事業所名	グループホームあすなろ		
所在地	〒059-1265　苫小牧市字樽前237番地1 （電　話）0144-67-8882		
評価機関名	社会福祉法人北海道社会福祉協議会		
所在地	札幌市中央区北２条西７丁目１番地		
訪問調査日	平成22年1月29日	評価確定日	平成22年3月1日

【情報提供票より】（平成２１年１２月１日事業所記入）

（１）組織概要

開設年月日	昭和・平成　１４年　１月　８日		
ユニット数	２ユニット	利用定員数計	18　人
職員数	18 人	常勤　16人，　非常勤　2人，　常勤換算　17人	

（２）建物概要

	木造平屋　造り
	1 階建ての　1 階部分

（３）利用料金等（介護保険自己負担分を除く）

家賃（平均月額）	30,000　円		その他の経費（月額）	12,000～17,000 円
敷　金	有（　円）		無	
保証金の有無 （入居一時金含む）	有（　円） 無		有りの場合 償却の有無	有　／　無
食材料費	朝食	300　円	昼食	450　円
	夕食	550　円	おやつ	円
	または1日当たり	円		

（４）利用者の概要（　１月　２９日現在　）

利用者人数		18 名	男性　5 名	女性	13 名
要介護１		3　名	要介護２	5	名
要介護３		2　名	要介護４	6	名
要介護５		2　名	要支援２	0	名
年齢	平均	84.5 歳	最低　69 歳	最高	93 歳

（５）協力医療機関

協力医療機関名	医療法人社団玄洋会　道央佐藤病院

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

母体法人が経営している総合医療機関や各種介護福祉施設と共に、自然豊かな広大な敷地に位置している。当事業所の認知症介護に対する取り組みとして、「その人らしく生きる」場を提供するため、管理者と職員が協同で利用者の介助に当たっている。

【重点項目への取組状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況（関連項目：外部4）
	前回評価で、運営推進会議で議題に即してメンバーを選定することが改善課題となっていた。議題に即したメンバー交代には至っていないが、家族からの協力が増え、２ヶ月に１回の会議の開催も定着し、サービスの質の向上につなげている。
	今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4）
	職員は２ヶ月に１回、事業所独自の自己評価であるファインド報告を土台としたケア目標を作成しており、今回の自己評価についても、全員が課題を提出し、見直しの機会とした。
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6）
	運営推進会議は、２ヶ月に１回開催している。会議での議題は、事業所からの報告、町内会行事や婦人部、ボランティア受け入れについて、評価調査の内容等である。また、家族が介護についての考えを述べる場ともなっており、意見交換を行っている。
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8）
	家族の来訪時や電話連絡等で意見を出しやすい雰囲気づくりに努めている。重要事項説明書には、相談・苦情等窓口及び苦情受付の流れ、第三者委員名、外部相談機関などを明示している。
重点項目④	日常生活における地域との連携（関連項目：外部3）
	広大な敷地内に、母体法人が経営している医療施設や各種介護事業所と共に立地しているので、地域住民との交流が難しい状況である。しかし、地区の自治会活動への参加や事業所の行事への参加を呼びかけたり、管理者がキャラバンメイトの資格保有者なので、サポーター養成講座を開催するなど、認知症グループホームへの理解に努めている。

２．　評 価 結 果 （詳細）

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営					
１．理念の共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	「その人らしく、好きな時に、好きな事を、安心できる場所で、健康で暮らせるあすなろにします。」との理念の下、医療介護施設群の特性を活かして、入院患者や利用者を住人と考え、敷地内の庭園や菜園、小鳥の飼育ケージの散策等を通じ交流を図り、社会性の尊重に努めている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	ユニットの真ん中ある共同のスタッフルームに理念とケアの目標を啓示している。また、朝の引き継ぎ時に、職員全員で理念を復唱し、常に意識するよう努めている。		
２．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域の小学校が行っている廃品回収等は利用者、家族、職員が協力しており、学芸会や運動会に招待されている。また、老人会に働きかけ、管理者がキャラバンメイトの出張講座を持つ等、地域に溶け込むよう努めている。		
３．理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	運営者や管理者は、評価の意義を理解している。全職員は２ヶ月に１回当事業所独自の課題表出法であるファインド報告を提出し、今回の自己評価につなげている。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、地域包括支援センター職員、町内会長、家族、施設長、協力医療機関の看護部長で構成し、２ヶ月に１回開催している。会議での議題は事業所報告、町内会行事、外部評価などであり、家族からは、介護や訓練状況等の質問がある。出された意見をサービスの質の向上に活かしている。		
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	キャラバンメイトの活動を通じて市職員と連携を深めるている。また、グループホーム連絡会の活動や研修会等でも積極的に連携を図っている。		
４．理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	２ヶ月に１回発行している「あすなろ便り」に利用者の様子が分かる写真を掲載している。また、家族の来訪時には職員から声をかけ、意見や希望を把握するよう努めている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に、ご意見箱を設置し、家族の来訪時には声がけを心がけており、要望や不満を記録し共有と改善につなげている。また、年に１回家族交流会を開催し、事業所の取り組み報告をするほか、意見や要望を聞き、スタッフ会議で検討、改善を図っている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	スタッフ会議で職員間の連携と、利用者との馴染みの関係の必要性について話し合っている。また、職員が一人で抱え込まないよう、必要に応じてケースカンファレンスを開き、離職を最小限に抑える努力をしている。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
５．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	同一法人の医療機関が認知症関連の専門病院であることから、充分な教育を行っており、個々の段階に応じた年間研修計画も立てている。また、ＤＶＤによる、制度や接遇等の事業所内研修も取り入れている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	北海道グループホーム協議会、苫小牧グループホーム連絡会の研修会等で交流を図っている。３月には、他事業所への訪問を検討している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援 **１．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応**					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用開始前に前利用サービス事業所を見学をしたり、当事業所でお茶をするなど、利用者が徐々に馴染めるよう工夫している。		
２．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	「出来る出来ないシート」を作成し、共にできることを把握するよう努めている。また、掃除、洗濯、裁縫、畑作業、習字など、利用者から学ぶことも多い。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
１．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の言動を、まず受け止めることを基本としている。また、一人の職員が結論を出さず、ケースカンファレンス等で判断し、共有を図っている。		
２．本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	家族からの相談や利用者の希望をもとに作成しているアセスメントシートを作成し、スタッフ全員のモニタリング、カンファレンスを行い、３ヶ月毎に介護計画書を作成している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	基本的に介護計画は６ヶ月毎に見直している。利用者の状態が変化した際には母体機関からの医師の往診を受け、その都度見直し、新たな計画を作成している。		
３．多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	かかりつけ医を受診する時は付き添っている。また、入院時には馴染みの関係を損わないよう頻繁に見舞いに行くよう努めている。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
4．本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者の多くが協力医療機関の受診者であるが、かかりつけ医師の確認と、眼科、皮膚科等への受診支援を行っている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化、終末期対応における方針は、利用者や家族と相談の上で同意書を受け取り、会議でスタッフに伝達している。		
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 **1．その人らしい暮らしの支援** **（1）一人ひとりの尊重**					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	事業所内で接遇研修を行っている。また、新規職員は採用時に、個人情報に関する同意、誓約書を提出するなど、意識の徹底に努めている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床、食事、入浴、就寝時間を、一人ひとりのペースに合せている。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（2）その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	「食事を５感で楽しもう」との観点からユニット中央部にオープンキッチンを設置し、体調に配慮しつつ、残存能力を維持するためにも、利用者は食事の準備や後片付けを行っている。また、好みや食事量に応じ食器の大きさ、盛り付けの工夫を工夫している。季節感にも配慮し、あすなろ農園の収穫物を献立に取り込んでいる。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	敷地内の50℃の温泉井戸から天然温泉を引いており、利用者の希望に沿って楽しく入浴できる体制である。入浴の回数が少ない利用者には、少なくとも週２回は声をかけ、入浴を勧めている		
（3）その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	ユニットの交流も兼ねて、週１回専門の音楽療法士による音楽療法を実施し、表情の変化や起きている時間の増加等、効果をあげている。また、利用者の趣味や楽しみごとの支援をしている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	敷地内の公園を整備しており散歩を楽しんだり、天気の良い日は畑仕事をするなど、気分転換や体力維持を支援している。また、冬場はドライブや外食の機会を多く設けている。		
（4）安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	玄関にセンサーを設置し、日中は施錠をしていない。防犯上の理由から、午後７時から午前７時まで施錠している。		

外部評価	自己評価	項　　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	○印 （取り組みを期待したい項目）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年２回総合訓練を実施している。活火山の麓という立地のため、市防災課、自衛隊、警察等との連携による防災対策訓練として、実際に避難も行っている。避難口誘導灯を床面に埋設したり、緊急備蓄の用意もあり、防災マニュアルも整備している。		
（5）その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂食チェック表を整備し、検食写真を添付している。摂食量の少ない利用者には、時間を定めず食事を勧めるなど配慮している。また、日々の献立は、医療機関の衛生管理栄養士のチェックとアドバイスを受けている。		
２．その人らしい暮らしを支える生活環境づくり **（1）居心地のよい環境づくり**					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間は広々としており、天井は吹き抜け式で、採光もよく温度計、湿度計を備え、換気にも配慮している。ソファーやダイニングテーブルは落ち着いた色合いである。和室には掘りごたつを設置しているが、こたつに出入りするのが難しい利用者が増えたことから、こたつ部分を閉められるよう改良している。また、清掃要員を職員以外に配置している。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室面積は基準の２倍を確保しており、備え付けの家具の中央部に仏壇や家族写真を飾れるよう配慮している。使い慣れた物の持ち込みも自由であり、その人らしく居心地よく過ごせるよう工夫をしている。		

※ ▒ は、重点項目。